

古流の形（古流第三の形）における礼式¹

--- 演武場内への入場から退場まで ---

志々田 文明

はじめに

古流の形（古流第三の形）は、富木謙治先生とその高弟大庭英雄先生によって、「真剣勝負」の形として形成された。大庭先生が指導された合気道の古流の形（第一の形から第六の形）のなかでも最も基本となるものである。富木・大庭両先生から薫陶を受けた井上斌氏（慶應義塾大学卒で早稲田大学合気道部OB）によると、その成立は1963（昭和38）年暮れから1964年はじめにかけてではないかという。本稿は富木先生が心血を注いで修行してきた技法を代表する古流の形の礼式について、その方法と精神を解説したものである。以下、両先生を師範と表記する。

私が早稲田大学合気道部の一年生の時（1968年4月入部）、富木師範が客人を連れて道場に現れ、部の主将に、「古流の形をやりなさい」と指示されると、北山正信主将は阪田正雄氏（次期主将）を受にこの形を厳粛に演じたものであった。それ以来この形は富木師範の合気道の奥義を示す代表的な形として晴の場面で演じられてきた。

大庭師範は、それ以前からいくつもの形をこしらえて学生や社会人に指導されていた。1969年、その内容を井上斌氏が『合気道の形』という本にまとめられた。井上氏は慶應義塾中等部時代から柔道を学ぶ一方で、当時富木師範が指導されていた杉山道場（1960年に青山のレスリング道場に移転）に通って、両師範からこれらの形を学ばれ、慶應義塾大学進学後はレスリング会館と早大合気道部で学ばれた。同書には親疎はあるものの古流第一の形から第六の形まで解説されている。富木師範が平素口にされた「古流の形」は大庭師範の順序では三番目におかれていた。そこで部員等合気道関係者はこれを「第三の形」と呼ぶようになった。

しかし富木師範には三番目という位置づけの認識は全くなく、いつも単に「古流の形」と呼ばれた。後に私は『新合気道テキスト』（初版,1963）の改訂版に「古流護身の形」と記されていることに気づき、この形を「古流護身の形」と呼ぶべきではないかと考えた。護身とはどこから攻撃されてもこれを防御して身を守ることであるから、多様な格闘形態、多様な方法での攻撃に対応した稽古をすることによってはじめてこれが実現する。富木師範はこの形をいわば真剣勝負の形として非常に重視し、門人に研究することを求めたことがわかるわけである。

¹ 本稿執筆の歴史は長い。2016.7.12にほぼ完成したが、多くの方に意見を求め加筆を加えて2017.5.7に脱稿した。2018.1.4及び2019.1.13に誤字訂正を行いこの脚注を附した。

大庭師範没後、私は日本合気道協会師範として、富木師範ご自身が用いた「古流の形」が「古流護身の形」という呼称を用いるべきだと考えた。「古流の形」の場合は第三番目の位置づけが決まっていることから、私はもう一人の協会師範であった成山哲郎氏と相談した。同氏の承諾の結果その後次第に、若い人々の間を中心に「古流第三の形」50本よりも「護身の形」（自然に古流の字が省略された）と呼ばれるようになったのである。

しかし思いもよらぬ事態が起こった。佐藤忠之氏（現在の協会師範）が『新合気道テキスト』初版（1963）にある「古流護身の形」の技数は50本ではなく、34本であり、並んで示される「古流武器の形」に17本があることに気づき筆者に教示された。同書を確認すると以下の様であった。

- ・古流護身の形・・・座技（8本）、立技（8本）、短刀に対する技（8本）、刀に対する技（5本）、槍に対する技（5本）。計34本

- ・古流武器の形・・・短刀（5本）、刀（7本）、槍（5本）。計17本

総計は51本である。このうち「古流護身の形」の34本は現在の「古流第三の形」とほぼ同じものと推定されるが、「古流武器の形」にある短刀5本は「古流第三の形」には含まれていない。井上斌氏によると、短刀5本とは「古流の形」（古流第三の形）の短刀取りの技法とは異なり、例えば短刀を持ったもの（婦人が想定される）の方がそれを防ごうとする相手の頸動脈を切って防御するといった技法である。護身術の技法ではあるが殺伐な印象を免れないこともあり、「古流の形」（古流第三の形）から取り除かれたと思われる。1968（昭和43）年春頃には大庭師範が新たに「古流第六の形」をまとめられた際にこれらの技5本が「古流第六の形」に取り入れられた。

「刀（7本）」と刀対刀の形を見ると、「古流第三の形」のそれより1本少ない。また「槍（5本）」は3本が少ないことがわかる。

以上から、本協会の成山・志々田師範体制の時期以降に、「古流第三の形」の代替名称として強調された「護身の形」（正式には「古流護身の形」）とは、後に50本に整理されて「古流の形」（古流第三の形）となるものの内、厳密には武器技を除く徒手中心の技法34本を示しており、「第三の形＝護身の形」の等式が誤解であることがわかる。

では富木師範が使用された「古流の形」と「古流第三の形」（大庭師範の呼称）のどちらの呼称を採用すべきであろうか。私は以下の理由から、「古流の形」あるいは「古流第三の形」（略称として「第三の形」）の両方を採用することを妥当と考える。前者を妥当と考えるわけは、富木師範ご自身の思想による。実際師範は、「第一、第二とやると、いくつでも形が増えることになる」と批判されておりご不満であった。師範は古流の技については、「古流の形」を深く研究していくことを求めたのである。ではなぜ後者を認めるのかといえば以下の理由がある。まず、大庭師範によって「古流の形」以外の技が形として編まれ、それら全体の個々の形に番号をつけられたために、早くから世界に広まっている事実があげられる。そしてそれに富木師範が明確に反対しなかった事実である。心中で不満であっても、全幅の信頼をおいていた大庭師範の献身から来る情熱を否定できなかったと思われる。以上から私は、両者は本名と愛称のような関係として認めるのが妥当と考える。

ちなみに大庭師範は秋田県立角館中学校時代に富木師範から柔道の指導を受け、1941年に満洲国に招き寄せられて以来、合気武道の指導を受けた。また富木師範の許しを得て、

剣道（古賀恒吉範士）、薙刀（園部秀雄範士）、居合術などを修行し、武道に対する深い造詣を得た。その師弟関係は戦後も変わらず、大庭師範は1961年頃指導者として秋田から上京以来、厚い信頼を置いて指導の現場をまかされていた。両者は緊密に相談されて合気道の品格のある礼式を形成していったと考えられるのである。

最後に本稿作成に至る経緯について一言しておく。パソコンに残された過去の記録から見ると、私は1997年7月27日頃には礼式の基本についてまとめることを考え始め、富木・大庭両師範の戦後における指導内容とその合気道に対する総合的な考え方をまとめた。またその年の日本合気道協会「師範部」の夏期合宿において山口升呉氏のご意見を伺い、同1997年8月6日に訂正した。山口氏（1967-1971早大合気道部在籍）は二年間連続「古流第三の形」の受をとり、大庭師範から懇切な指導を何度も受けた方であったからである。その後の2005年9月25日、全体を再考して、本稿の骨格のほぼ全体を執筆した。また2009年には更に加筆してA4四枚刷りにまとめ一部の人に頒布した。しかし当時の協会内も不協和音のなかで意見の共有が見られないまま、検討確定されることなく今に至った。

2014年暮れの昇段審査会において礼式の乱れが高段者によって指摘されるに至り、師範としての対応が私に求められることになった。私は早速佐藤忠之氏に意見を求めながら2009年版の改訂作業に取りかかった。あるまとまりを得た段階で一部の有志に意見を求めるなかで、多くの問題点が明らかになった。

そこで私は、まず大庭師範から直接指導を受けた山口氏に加えて北山氏（1965-1969早大合気道部在籍）に意見を求め、それぞれ貴重なご教授を得た。また井上氏をも煩わしてご教授を得た。井上氏が富木・大庭両師範から学んだ期間は1958年7月から1968年の渡英まで十年に亘っており、古流の形の大先達である。さらに特に大保木輝雄氏（埼玉大学名誉教授）から剣道に関して教授を得た。やっと仕上げたと思い、後輩の小林卓氏と谷繁強志に送ったところ、再び有益な意見とご指摘を受けた。その後多忙となったため、約10ヶ月の空白を経て訂正を施して搁筆した。記して各位のご教示に深謝する次第である。

なお執筆に当たっては、両師範の根本精神及び関連武道の理論と方法にも留意したが、元より不完全を免れない。さらなる検討を加えていただければ幸いである。

1. 古流の形（古流第三の形）の様式

大庭師範は、この形は、波が両方から大きな勢いで打ち寄せ、ぶつかり合って碎け去り、潮が退くように静かに退いていくように行う、と表現された。この形の全体的な基調をいわれたものである。私の学生時代、毎日の稽古が終わった後、主将が取、次期主将と目された実力ある下級生が受で、しばしば稽古がなされた。大庭師範が早大合気道部の稽古にいらっしゃると、彼らの稽古を静かに見守り、訂正・助言して何度も反復させた。その効あって、北山（主将）—阪田（次期主将）組、阪田正雄（主将）—山口升呉（次期副将）、天倉国博（主将）—山口升呉（副将）組ら歴代幹部らの行なう第三の形は改善されていった。下級生であった私は、門前の小僧宜しくその光景を繰り返し見る中でこの形の精神と

方法を学んだものである。こうした様式は東京の他大学にも伝播し、後に全国の同好の士にも伝わっていった。

2. 武器使用における考え方

この形は、様々な格闘形態において、徒手で相手の様々な攻撃をかわし、投げ、抑えて、合気道の技の理合を表現しようとしたものである。相手の攻撃は、無手による場合にのみならず、短刀、木刀、槍（杖）を用いて行う。『新合気道テキスト』初版（1963）にあるように杖ではなく槍である。それらの武器の使用については、略式ながら、次のような性格と精神をもたせて行うので、扱う際の所作には特に留意されたい。

短刀は鍔なしの片刃で、刃長が一尺以下、刃を上にして腰に差して用いられる。斯界においては古くは木製のものを使用していたが、大学のクラブでは同じ形状のゴム製のものを使用してきた。安全性の観点からゴム刀の使用を本則とする。

木刀は全長3尺3寸5分（102センチ）の長さで、そのうち刀身部は2尺5寸（約75.5センチ）、柄は8寸（約25センチ）で、櫛の日本刀の形状のものの使用を原則とする。富木・大庭両師範が指導された伝統に則り、演武においては原則として鍔無しのものを使用し、時に鞘、鍔のある日本刀であることを仮定して扱う。

槍は入手の容易さの関係で杖によって代替される。嘉納治五郎師範は神道夢想流杖術を高く評価し、その晩年には講道館に清水隆次氏を招いて高段者に学ばせている。同流の杖は長さ4尺2寸1分（約128センチ）、直系八分（約2.4センチ）である。同流は剣道界の重鎮だった中山博道範士が学び杖道範士にもなったこともあり、戦前戦後を通じて杖術の標準的存在であったと思われる。こうしたことから大庭師範も杖の使用についてはこだわることなく同流の杖を用いたと思われる。

富木師範は杖ではなく「槍」と記し、また、大庭師範が指導されたように、杖は鉄製の穂先と石突きがある短槍を仮定して扱う。その技法は手槍（柄の長さ4尺前後、穂身3寸ほどの短槍）に対する技法である。

槍の技法は、槍による突き攻撃に対する徒手側の奪取法と、奪取した槍で攻撃した場合に、槍に組み付かれた場合の離脱法、また離脱の結果としての投げの技法とから構成されている。なお、以下では原則として「槍（杖）」と表記した。

3. 全体の流れと礼法の概要

演武場外での座作進退は、その演武場の形状によって異なり定型はない。環境に応じて平素の立ち居振る舞いに準じて行うことを可とする。以下の説明は、約50畳の演武場の外に若干の待機の場所がある場合のものである。

(1)待機

演武時間のかなり前では安座姿勢をとって待機する。演武開始に際し、取は立って、右手で、木刀の鍔下（鞘の上部）を、切先が前方になるように、刃を下にして持って自然に下げ、姿勢を正して待機する。なお右手に持つのは攻撃の意志がないことを示す。

受は同じく右手に、槍（杖）、木刀、短刀を束ねて持って、取の近くで待機する。束ね

て持つ際には、木刀と槍（杖）との頭を揃え、木刀の鍔元付近に短刀を並べるようにもつ。大庭師範は北山氏に、三点がばらつかないようにと指導している。なおまた木刀及び短刀は刃が下向きになるようにする。

(2) 入場と正面・相互の礼

演武は、取は演武場の正面に向かって右側、受は左側に、約三間（約5.45メートル）の間をとって対峙して行われる。入場可を認知した取と受は、演武場の正面の反対側の中央付近に位置し、一礼して入場し、それぞれ演武開始位置まで前進する。〔なお、入場の際に取が上級者の場合は取が先に受がこれに続いて入場といった方法はこれをとらない〕。両者呼吸を合わせて正面に向かって礼〔約30度〕を行う。続いて受取対面し、同様に相互の礼を行う。礼の動作は取が主導しつつも呼吸を合わせて同時に行うようにする。なお、相互の礼はこの時の礼と演武終了時の礼の二回だけである。品格のある礼に心がける。

(3) 準備

相互の礼を終えた取は、そのまま木刀を保持し、細かい継足で左回り（内回り）し、左後方斜め45度に向き、一間半ほど前進して座る。着座の過程で木刀を水平に保持し、刃を前方外側（手前が峰）、柄を右にして、自分に平行になるように畳に置く。起立着座は右起左座にて行なう。

なお、木刀を畳に置く際の所作として、大庭師範によって1968年頃から、鞘の先端を畳に垂直につけてから、刃を前方外側にして置くようにする指導が、山口氏以下の世代になされている。所作を洗練させたものである。

一方受は、取と同様に木刀以下の武具を保持し、右回り（内回り）に回転し、右後方斜め45度に向き、一間半ほど前進して座る（演武場が狭いなど安全性に問題がある場合には距離と位置を変えることができる。）。

武器が畳につかないように維持しながら坐り、木刀と短刀は柄の部分が右、刃が前方外側（手前が峰）を向くように、また槍（杖）はそのまま、演武を行う際の使用順に従って手前から短刀、木刀、槍（杖）の順に並べておく。

取・受は呼吸を合せて無手にて立ち上がり、取は右回り（内回り）受は左回り（内回り）でそれぞれ開始線に向いて前進し、ほぼ三間を隔てた開始位置で自然体にて対峙する。

4. 演武における留意点

(1) 座技（半座半立技を含む）

一本目（押し倒し）。両者、呼吸を合わせて静かに進み、一間の距離で立ち止まり（構えは自然本体でも若干の半身でもよい）、静かに座りつつ膝行にて技法を行うに適当な間合いまで詰める。間合いを詰める際には、取がはじめに位置を決め、受がそれに合わせて一本目の技の間合いに詰めて座す。この形は、取、受共に武道家として「先」（先の攻撃）の気持ちをもっているという前提の中で、座って静寂の一呼吸をおいてから始める。

なお「先」については、剣道界で使用される「先々の先」²「先」「後の先」の三つの用語が富木・大庭両師範によって用いられている。先について歴史的・術理的に最も深く研究されたと評価される三橋秀三範士はその著『剣道』（1972）で以下の定義をしている。

- ◇ 先々の先：相手の打突を予知した機会（相手の攻撃を予知した出はなわざ、相手の打突を予知した応じわざ）
- ◇ 先：相手にすきが生じた機会（相手の攻撃を予知した出端（ではな）わざを除いたしかけわざ）
- ◇ 後の先：相手の打突を外した機会（相手の打突を予知しない応じわざ）

これを合気道に即して応用すると、「先々の先」は、心中の動きを予知すること（精神的レベル）、先は相手より先の攻撃技（現象的レベル）、後の先は相手の先の攻撃を応ずる技（現象的レベル）と簡潔に整理されよう。

一本目。両者対峙して座し一呼吸する間に、取は受に攻撃の意図があることを見抜いて（予知）、受の前頭部（顔面）を攻撃する。予知の場面は「先々の先」の理合い、顔面攻撃は「先」の理合いである。受が右手刀でこれを受けた瞬間に、取はその腕を捉えて押倒しをかけ、一気に受を腕挫き抑えて制する。全体として「先」の理合いが表現されている。

二本目（逆構え当て）は、受による取の左側頭部への打ち込み動作の起こりをとって、取が左前方に入身しながら逆構え当てで倒す。「後の先」の理合いの技である。

三本目（小手返し）は、先になされた受の攻撃が尽きたところを制して同じく「後の先」の理合いでかける技法である。

四本目は、受が先をとって取の両手首を制して取を引き上げようと立ち上がり、膝で蹴りを入れようと意図する場合に応じる技法である。佐藤氏はこの蹴りの意図について大庭師範から指導を受けている。この形は、「古流第一の形」にある受の攻撃の方法と長い間取り替えられて稽古されてきた。よって以下の手順を紹介しておく。

取はそのまま受の引き上げる力を利用して手刀を平行に肩口へあげて受けを崩すようにする³。崩しの後の動作は概ね以下の様になる。一瞬上体の力を抜き、右肩を下げて左手を自分の右耳に近づけるようにして、鞭のように自分の後ろ腰に手甲を打つようにして、受をその前方に大きく崩し投げる。崩す一瞬前に右手甲で受の右足首内側を払うようにして（実際においては崩しが強力だと払う前に受が飛ばされる）、右回りで転体し、右手刀

² 井上斌氏、山口升呉氏また私も富木先生が「先々の先」という言葉を用いていたのを聞いた記憶がある。一方で井上氏は、大庭先生は「先の先」という用語も使用したという。「剣道篤学の士」と評される阿部鎮著『歌伝剣道の極意』（1978）によれば、「先の先」という用語は「先々の先」と同意という。同書には「先の先」の典拠文献は示されていない。なお山口氏によると、富木先生は、「そのまま放置しておく、いずれ敵になって攻撃してくるかもしれないから、その気にさせないように、先に手を打っておくのが『先々の先』なのだ」と笑いながらいわれた、という。

³ この点について佐藤氏は大庭先生からさらに詳しく蹴りを防ぐための方法を指導されている。この点については別の機会に譲る。

を投げた方向に向けて残心する。

五本目（後首絞め・転回小手捻り）以下は省略する。

なお、以後すべての演武中において、着衣の乱れが生じた場合は、演武を中断することのないよう技が終わって元の位置に戻る過程で適宜直すようにする。

(2) 立技

座技八本目で前落しに投げられ、前方回転受身をとってから振り向いた受は、小走りに前進して取の両襟を合わせるように、人差し指を差し込んで掴む。以後の受・取の攻防は、本稿冒頭に記したように、波が激しくぶつかっては退いていくかのように各技を行う。またこの部門では8本全体として、スピーディーに連続して行う。

三本目（袖取り・逆構え当て）。受の左手で中袖をとられた取は、斜め右横に移動して右腕で受をその小指斜め左横に崩し、続いて受の左肘をその外側の上からえぐるように巻き込み崩した後、逆構え当てをかける。なお、大庭師範没後に、中袖をとられた取が、右真横を向いて手首を極めてから崩しに入る稽古が一部に見られたが、これでは右真横に向いた際の受の右手での当身攻撃を防御できない。常に完全防御の基本である「手刀合わせ」の精神に留意して基本の教えに留意しなければならない。

六本目（後方送り襟締め・前落）から七本目の抱え取り・転回小手捻りへの接続は、長く奇妙な変形でなされる場合があった。それは投げた後に取が受のすぐ側に近づき振り返って歩き出すといった方法である。これは七本目の技法が正しく伝承されてこなかったために生じた誤解である。正しくは以下の様に行う。

受を前方に投げた後、取は受の起き上がる位置を見定めながら、前足（左足）の方に体を寄せて立ち、受が取の方向を向いたときに[受・取の受距離は約一間]、くるりと180度回転し、歩み足で前進する。受は小走りに歩み寄り、抱え上げようと両腕の外からつかむ。その瞬間に取は下腹を出して胸を張り、同時に両腕を張って受を崩し、転回小手捻りにとるのである。なお、この形の妙味は、背を向けて歩き出した取と、受との間にある。取はどのようなタイミングでも技をかけられるように修練しておかなくてはならない。

座技・立技の一連の演武終了後、両者対峙したまま歩み足で後退し、開始位置付近に至り、手刀を軽く下段右構えにとり、構えを解きながら右足をさげて、自然本体に戻る。なお、一連の動作では、取、受け呼吸を合わせて行う。

取は自然体のまま待機する。受は始めの入退場の要領で武器のある位置まで退がって正座する。一呼吸後、短刀を取り上げる。井上氏及び山口氏によるとその方法は、右手は掌を上、左手は掌を下にして、峰を手前（刃を前方に）して両手で取りあげ、その後柄がしらに右親指をかけて逆手で握る。右親指を柄がしらにかけるのは、突いた際に手が滑って短刀で自傷しないためである。その手を右太ももの脇に自然に置いて演武開始位置まで進む。

(3) 短刀取り

一本目。取と向かい合った瞬間に、右短刀を下段において右構えに構える。取も合わせ

て、手刀右下段に軽く構えて演武に移る。なお「短刀取り」八本全てにおいて刃は外側[四本目は上側]となるように握る。

同様に八本全ての演武が終わると、受は、従前の要領で短刀を置きに戻り、正座する。始めに短刀をつかんだ際の要領で、静かに両手で畳に置き戻す。

刀取り準備動作。大庭師範は木刀を太刀と呼ぶ場合があった。太刀は刃を下にして腰に吊るす刀であり、刃を上にして帯に差す刀とは異なる。しかし日本刀の区分とは異なって全日本剣道連盟制定の日本剣道形では受のことを打太刀、取のことを仕太刀と呼び、その内容も太刀7本、小太刀3本と太刀という用語を使っている。以上から大庭師範も用語の使用には大らかであったと思われる。しかし富木師範の『新合気道テキスト』1963年版には太刀や組太刀の言葉は見られず「刀」と明記している。そこで本稿では富木師範に従って「刀」の語の使用し、「刀取り」「刀対刀」ををもって本則とし、「太刀取り」「組太刀」ををもって代替可とした。

演武者は原則として木刀を鞘のある真剣と仮定して扱う。刀の前に正座し、左手の掌を下に、右手は掌を上にして刀の柄と鞘部分を、刃を前方に向け峰が手前に来るようにつかみ、切先を下に向け垂直に立てて畳に着け、左手を自然に鰐際まで滑らせ、軽く半回転させてから、刃が上になるようにしながら、両手で左腰に差し込む仕草に準じてそのまま左手を腰につけ、右膝から立ち上がる。立ち上がった後は自然に左太もも脇にさげて持つ。これを「提刀⁴」という。従前の要領で向きを変えてから前進し、開始線に至る。

(4) 刀取り (太刀取り)

一本目。両者向かい合った瞬間、受は体側に自然に垂らしていた刀を腰につけ帯刀（この際、柄頭が正中線方向に向くようにする）する。山口氏への大庭師範の指導によると、その際に左手の親指で鯉口を切る仕草をして、右手を柄頭から鰐もとに向かって移動するようにしながら柄にかける。受は刀を抜き放つようにしながら右足を出し、右構えに構える。一方、取は軽く右下段に構える。両者前進し演武に移る。

奪取した刀を手渡す所作。刀取りの各技の後、刀を手渡す方法は、奪取の後、又は倒した後（三本目）は、刃が自分側に向くように、右掌に柄を左掌に刀身を載せ、相手が取りやすいように右手の柄頭をやや前にして手渡す。なお井上氏によると、両師範の教えには銜いがなく、素っ気ないほどシンプルであった。大庭師範没後に「右構えで相手の眉間につけて構えながら、両者呼吸を合わせて元の位置に戻る」といったやや大仰な形式が加えられ普及したが、両師範の指導の変形であるだけでなく教えからの逸脱である。

最後の演武が終わると、後退して両者右構えで対峙し、取は構えを解きながら右足をさげ、自然本体に戻る。受は、太刀を納刀し、左手で左腰につけながら、左足を前に出して自然本体になり、右手を柄頭方向から元に戻しながら、左足、右足の順で後退し、自然本体になる。続いて太刀を左腰から提刀に戻す。

⁴ 提刀は立礼の際に腕を伸ばして木刀などをもった姿勢をいう。左手の親指を鰐にかけず、残りの四指で鯉口近くを握り、柄頭を腹部中央に向ける。鰐（刀の先端部）は約45度下がりになるようにする。

続いて受は、従前の手順で武器の位置まで戻り、左腰につけた状態で正座する。この際、鞘が畳に触れたり、柄が下向きにならないよう注意する。右手を添えて両手で木刀を腰から抜き取り、従前の要領で、両手で切先を畳につけて垂直に立て、左手を鞘に沿って下に下げてから右に倒し、静かに元の位置に置き戻す。

槍取り準備動作。続いて、木刀と同様に、槍（杖）を両手（右手は掌を上、左手は掌を下）で掴み、右手で槍（杖）の中程を掴んで、右膝斜め前方側に立てる。右腰につけて立ち上がる。同時に右手を伸ばして、槍（杖）の先が上に向くようにつまみ持ち、左手は自然に下にさげる。その際、槍（杖）を畳に触れさせてはいけない。次で従前の方法で演武場に向き、そのままの形で入場する。

(5) 槍取り

一本目。両者対峙するや、受は左足を出しながら右手を伸ばして穂先を相手の心臓につけ（この動作は相手を威圧するため、やや素早く行う）、左手で右手の拳の前を握り、続いて右手を手前に滑らすようにして握って右腰につけて構える。取も同時に右構え右手刀を下段に構える。私は学生時代に大庭師範がこの方法で指導するのに立ち会っている。これが簡易化したものであるとも言われた記憶があるため、この方法で覚え指導して来た。

しかし昭和45年以前には、大庭先生は以下のように教えられたようである。井上氏によると、「受のこの最初の構え方は昭和45年頃大庭師範が試みた構え方である。従前の構え方は、右手で槍（杖）の中ほどを順に持ち、その手を右顎の下まで引き上げ、左手を右手に被せて順手に握りながら、右手を槍（杖）尻に滑り下ろし左足を一步前方に踏み出し、槍（杖）の先端を時計の反対周りに半回転させ水月を狙い、右手は右腰骨の辺りにつける。個人的にはこの方が易しく初心者にも形が取り易いと思われる。槍（杖）先を右手で相手に付ける方法は右手を滑らせる時槍（杖）を動かさぬようにしっかり構えることがポイントである」という。

奪取した槍を手渡す所作。槍（杖）取りの各技5本を終える際の手渡す動作は、相手が取った後に構えやすいように畳に対してほぼ平行にして手渡す。受け取った取は後ろに間合いをとって構える。

なお、槍（杖）は短槍を仮定して行うが、穂先の側ばかりを意識して行わなければならないわけではない。槍には反対側に石突きがあり、これも十分に威力があるからである。

(6) 槍（杖）に組み付かれた場合の技

槍（杖）取り五本を終えた後から槍に組み付かれた場合の技への推移は、特に開始線に戻ることなくそのまま連続して行う。八本目終了後に槍（杖）を手渡された受は、受は槍（杖）を持った左構えで開始位置に戻る。取は特に構えることなく開始位置に戻り、軽く右構えにした状態から開始位置に戻る。両者呼吸を合わせて、取は左足を前に出して手刀の下段の構えを解き、両足を揃える。左足、右足の順で半歩後退して自然本体に復する。

受は右手で槍（杖）の中程に持って当初の形になり、左足を引きながら自然本体に復する。両者、従前の方法で武器の位置へ退く。

(7) 刀対刀（組太刀）

刀対刀（組太刀）準備動作。取、受ともに、木刀取りの際の受の所作によって木刀を持ち、開始線に至る。当初の間合いはほぼ三間程度の間合いをとる。これは互いに構えた状態から右足、左足、右足と足を運んで打ち合える距離である。

一本目。切落しをした後、一旦、剣先（鋒＝切っ先）を合わせた一足一刀の間合いを取ったのちに、両者、左足、右足、左足の順番で後退して最初の位置に戻る。刀対刀のこの形はすべて一本終わるごとに定位置に戻る。

二本目。取が右に体捌きして右構えで打ち込んだ後、残心を取り、続いて受は取に向かうように後退しながら両者剣先を合わせ、下がりながらほぼ三間の間合いを取る。

三本目。取が左に体捌きして左構えで打ち込んだ後、残心を取り、続いて右足を前、左足を後ろに下げて右構えに戻してから、間合いをはずして、元の位置に戻る。

八本目の演武後、受、取相互に開始位置に構えながら戻り、右構えのまま腰の鞘に刀を戻す従前の要領で納刀し、静かに左足を前に寄せて自然体となる。続けて左足、右足と後退し、左腰につけた刀を下ろして自然体となる。

取はそのままの位置で受の戻るのを待つ。受は、従前の要領で戻って刀を置いた後に、三つの武器を揃えて右手で握り〔刀・短刀の刃、槍の穂先が下を向くようにする〕、腰につけて立ち上がった後、右手を自然に降ろす。一方、取は、受が開始位置に進もうとする頃合を見計らって、左手に降ろした刀を、刃が下を向くように右手に移しかえ、両者、入場時と同様に立つ。

両者、呼吸を合わせて礼をし、続いて正面に礼をする。続いて取、受は内回り（取は左回り、受は右回り）にそれぞれ向きを変えて入場時の位置に向かう。そこで改めて正面に一礼する。⁵以上

⁵ 戦前の剣道界の重鎮、高野佐三郎・中山博道両範士の演武では、上座に尻を向けない配慮からか、上座を向いたまま場外に下がっている。また両者は続いて場外隅で再度相互の礼を蹲踞で行っている(両範士の演武DVD参照)。富木・大庭両師範の指導においては場外隅での礼はこれを行わない。